

専門家によるレポートへの個別フィードバックを支援する指針の提案

A Proposal of Guidelines for Supporting Subject Matter Experts
in Providing Individual Feedback on Report Assignments

天野 慧*1, 山下 藍*1, 都竹茂樹*1, 平岡齊士*1

Kei AMANO, Ai YAMASHITA, Shigeki TSUZUKU, Naoshi HIRAOKA

熊本大学教授システム学研究センター*1

Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University*1

<あらまし> 「正解」がない問題に対する受講者の学びを支援するためには、一つひとつ異なる独自の学習成果物をチェックし、フィードバックコメントを提供して、受講者を着実な学びへ導いていく必要がある。筆者らは、このような学習課題で教科内容の専門家がどのような視点に留意してフィードバックコメントを作成すればよいか、そしてそれを評価者間でどう共有していくかを提案した。これまでの筆者らが実践研究を経て蓄積してきた個別フィードバックの方法を振り返り、1) 概念に基づく解釈、2) 受講者の主張を尊重、3) 受講者の記述を引用、4) 1人称の視点、5) 専門家としてアイデアを例示、6) 情報付加型フィードバック、7) 発展的な学習への誘いの7つの視点を提案した。さらに、こうした視点を評価者間で共有するための方法として、1) マニュアルの提供、2) 練習の機会（ワークショップ）の提供、3) よくある失敗に対する認識合わせ、4) コメント例の提供を挙げた。

<キーワード> 個別フィードバック, 「正解」がない問題, チームティーチング

1 はじめに

筆者らは、受講者が提出したレポートに対する個別フィードバックに着目して、大学公開講座の改善(天野ら 2019)に取り組んできた。この研究では、フィードバックの機会を複数回設けることや受講者に独自の考えを求める課題でフィードバックを提供することが講座修了への動機づけを高めること、そして受講者による自己採点を導入することがフィードバック作業の効率化につながることを明らかにした。その一方で、この作業は評価者に負担がかかるために、どうチームでフィードバック作業を運用する体制を構築するかが課題となっていた。そこで、本研究では、評価者がチームでレポートにフィードバックコメントを作成していくための方法を提案することにした。

2 研究の方法

研究の対象は、熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン（以下、ID）入門編」である。講座の受講者は、大学教職員や医療系職種従事者、企業内の人材育成担当者、専門学校教員等、何らかの教育という業務に従事する社会人である。この講座では、受講者にIDの基礎知識を習得させ、教育事例の改善に役立

てもらうことをめざしていた。評価方法の概要を表1に示す。学習目標は、受講者自身が直面している課題に対する解決策を考案することのように、解が一つに定まらない問いに対する受講者の取り組みを対象にしていた。また、評価者の資格をIDで修士号を持つ者とし、教科内容に精通した専門家としたことが、本実践の特徴である。これまでに筆者らが実践してきた方法をリフレクション（再吟味・棚卸し）して、個別フィードバックのノウハウを整理することにした。

表1 評価方法の概要

●	学習目標：ID理論を応用して、教育事例の改善案を提示できる
●	評価要件：受講者自身の教育事例に対する改善アイデア等をまとめたレポートで合格基準を満たすこと ※詳細は、天野ら(2019)を参照
●	評価者の資格：IDの修士号を持つ専門家

3 専門家によるレポートへの個別フィードバックを支援する指針

専門家によるレポートへの個別フィードバックを支援する指針を表2にまとめた。正解がある学習課題の場合は、専門家が知っている解にどうやってたどりつけばよいかを解説すればよい。ところが、解が一つに定まらない問題の場合には、専門家が一つひとつの成

果物をチェックして、専門領域の主要な概念（この研究フィールドの場合はIDモデル）に基づいて自分の解釈を述べる必要がある。常に概念に立ち戻ることによって、評価の公平性を担保することにもつながるだろう。また、解が複数ある学習課題であるからこそ、避けなくてはならないのは、専門家が自分の考えを押し付けることである。それを防ぐために、2) 受講者の主張を尊重、3) 受講者の記述の引用、4) 一人称の視点、5) 専門家としてのアイデアの例示を挙げた。最後に、フィードバックを単に成績判定の場ではなく、受講者のさらなる学びへつなげていくものとするために、6) 情報付加型フィードバック、7) 発展的な学習への誘いを挙げた。

表2 専門家によるレポートへの個別フィードバックを支援する指針

(1)	概念に基づく解釈 専門領域の主要な概念に基づいて、自分の解釈を述べる。
(2)	受講者の主張を尊重 フィードバックの際は何らの基準を尺度として重箱の隅を突くような診断結果を述べるのではなく、受講者が「やりたいこと」をどう発展させるかを提案する。減点法ではなく加点法。
(3)	受講者の記述を引用 受講者が書いていることから離れて、評価者が印象や意見を書いてしまわないように、受講者の記述を引用してコメントを付与する。
(4)	1人称の視点 「正解」がない学習課題の場合、専門家の考えも一つの主張に過ぎない。そのことを意識し、評価者は自分の考えを押し付けるのではなく、「〇〇してはどうか」「〇〇と読み取れた」のように、あくまで一個人の考えとしてコメントを書く。
(5)	専門家としてのアイデアを例示 課題解決学習における専門家の役割は、より有効なアイデアを例示することである(Merrill 2012)。受講者のアイデアをさらに良くするにはどうすればよいか、専門家として受講者の課題をどう考えるかを例示する。
(6)	情報付加型フィードバック うまくいっていない点については、出来不出来だけでなく、どこをどう直せばよいか、具体的な情報を提示する(鈴木 1989)。
(7)	発展的な学習への誘い 事後のさらなる学習につながるよう、受講者が記述している内容に関連のある参考文献等を紹介する。

4 どうチームで共有するか？

チームで持続的に運用していくためには、この指針を評価者間で共有していく必要がある。その方策として、次の4つを考案した(表3)。マニュアルや練習の機会の提供で終わりではなく、運用の継続的な改善につながるように、3) よくある失敗に対する認識合わせや、4) コメント例の提供を盛り込んだ。

表3 評価者間で方針を共有する手立て

(1)	マニュアルの提供 表2の視点をもとに、受講者が提出するレポートのどこに着眼して、どうフィードバックを作成すべきかについての手順をステップ・バイ・ステップで提示する。
(2)	練習の機会の提供 新たな評価者がフィードバックコメントを練習できる機会を実施する。表2の視点を網羅したチェックリストを作成して評価を行ったり、模範例との比較を行ったり、疑問を解消したりすることによって、評価者間で方針の認識合わせを行う。
(3)	よくある失敗に対する認識合わせ コメントが困難な例や評価がわかれる事例を予め評価者間で共有し認識合わせを行う。実施後に、コメント作成で悩んだことなどについて振り返りを行い、今後はどうするかを事例として更新していく。
(4)	コメント例の提供 コメント作業中のジョブエイドとして、過去のコメント例を提供する。評価者がコメントの方針に悩んだときに参照することができる。

5 まとめと今後の課題

本研究では、専門家によるレポートへの個別フィードバックを支援する指針を整理し、それを評価者間で共有する方法を提案した。今後は、専門家による形成的評価や実地評価と改善を行い、この手法を洗練させていきたいと考えている。

参考文献

- 天野慧, 都竹茂樹, 鈴木克明, 平岡齊士 (2019) 社会人向け教育プログラムにおける修了に対する動機づけを向上させるための個別フィードバックのデザイン. 日本教育工学会論文誌. 41(4): 331-343.
- Merrill, M. D. (2012) First Principles of Instruction. Pfeiffer, San Francisco
- 鈴木克明(1989)テレビ放送番組による外国語教育を補うドリル型CAIの構築について. 放送教育研究, 17: 21-37